様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月１５日現在

機関番号：52301
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520201
研究課題名（和文）抄物の文学的研究

研究課題名（英文）On the Literary study of SHOMONO”抄物”.

研究代表者
小野　泰央（ONO　YASUO）
群馬工業高等専門学校・一般教科（人文）・教授
研究者番号：90280354

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本中世における漢文学を踏まえるか、また五山漢詩文の傾向にあるかを踏まえた上で、「抄物」が、中世漢文学のなかでいかなる位置にあるかを解明した。抄物は、宋代に文学理論を踏まえているが、別に日本的な視点も存在する。それがどのような点にあって、特に五山詩にどのように影響しているかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study I propose analyze about SHOMONO”抄物”as literary text. SHOMONO is commentaries written in kana and the language of commentaries, and influenced by Song literary critiques. On the other hand SHOMONO is some relevant with Gozan”五山” poem. This study cleared the phenomenon of relation of them.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	400,000	120,000	520,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：文学
科研費の分科・細目：国文学
キーワード：抄物、五山文学

１．研究開始当初の背景
抄物については、柳田征司『室町時代語資料としての抄物の研究』(武蔵野書院、平成10年）が主要文献であるが、それは基礎文献研究や国語学的な見地から語彙研究がなされているだけである。さらに、現代まで抄物の解釈方法を論じたものは少ない。主として、「三体詩抄」に関しては、名波弘彰氏「「三体詩抄」における説心素隠の漢詩享受―「賦ニシテ而興ゾ」を中心として―」（「中世文学」一九号、昭和四九年八月）や「杜詩抄」に関しては、太田亨氏「日本禪林における中國の杜詩注釋書受容」第五五集、平成15年「日本中国学会報」）などしかない。一方、また五山を文学的な見地から捉えたものに蔭木英雄『中世禅林詩史』（笠間書院、平成6年）がある。これは五山文学を本格的､かつ網羅的に捉えた書で、詩文の傾向をも示しているものの、やはり基礎的な研究であって、伝を軸にしながら断片的に詩人を論じているのみである。

２．研究の目的
まず原典である中国詩集が、抄物においてどのように解釈されているかを明確にする。具体的には、「杜詩抄」「山谷抄」「蘇詩抄」（『四河入海』等）「古文真宝抄」「江湖風月集抄」のそれぞれの注釈傾向を明らかにした後、中国注釈書とどのように乖離しているかを解明する。その上で、文学史的のなかでどのような特徴を示しているかを示す。具体的には、それぞれの五山漢詩における受容とどのような間係にあるか、また歌学史に対してどのような距離にあるか。

３．研究の方法
「山谷抄」「三体詩抄」に関して、中国注釈書や詩話と比較を行う。それぞれの抄物がどのような注釈傾向を持っているかを解明する。次に、一作者、例えば、万里集九は、「山谷抄」（『帳中香』）と「蘇詩抄」（『天下白』）と「古文真宝抄」それぞれの抄物の解釈方法をあわせて、万里集九の注釈態度はどのようなものであるかを明らかにする。『五山文学全集』『五山文学新集』における杜甫・黄山谷・蘇東坡と受容とどのような違いがあるかを示す。
『五山文学全集』『五山文学新集』に収録される五山作品を平安漢詩と比較して、如何なるところに相違があるかを示し、日本漢詩上の五山文学の特徴を浮き彫りにする。

４．研究成果
①中国詩論、特に宋代詩話は、五山文学や抄物だけでなく、中世歌論にまで大きな影響を与えていると考えられる。梅の詠は平安のそれとは違って、宋詩や禅語録を引用しながら賦して、五山の精神を反映している題材であるといえる。平安漢詩に比して、五山の詩は詩を論じることが頻繁であった。その要因も宋詩に依拠にあると考えられる。宋詩の特徴のひとつに、散文的論理性を見出すという捉え方があるが、五山漢詩のそれまでの古代漢詩に見えない特徴も作詩という行為を客観視したことにあると考えられる。そもそも、五山では実際に詩を論じることが日常で行われていたことが推測されるが、それが詩に賦されているとところに、五山の理知性があるといえる。五山僧のその詩学の相伝は抄物において過剰な深読み、所謂「底意」を生むが、詩歌の背後を過度に読み取る「底意」「裏説」は、相伝された詩歌学隆盛の果ての現象で、それを自らの作品で実践すれば、自注となる。その自注を付した作品が五山詩には見られる。一方、製作における引用においては、前代の表現を公然と引用する黄山谷の「換骨奪胎」が早くから意識されていた。両者は無関係ではない。彼らが『三体詩』の表現を換骨奪胎する場合、彼ら独特の解釈である「底意」に基づいている引用している場合もある。
②中国宋代では詩話が夥しく刊行された。その詩論は日本室町の虎関師錬の『済北集』「詩話」および義堂周信の『空華日用工夫略集』に本格的に受容され、抄物などの注釈などにも頻繁に引用された。であるから、宋代詩論はまた五山禅僧にとって作詩の対象ともなった。この点、五山漢詩が平安漢詩と相違する点の一つである。

③絶海中津とともに五山文学の双璧と称される義堂周信が（『日本詩史』巻之二）、杜甫の「文章一小技、於道未為尊〈文章一小技、道においては未だ尊きとなさず〉」（『杜少陵集』巻十五「貽華陽柳少府」）を踏襲して禅道に比した時の文学を批判した一方で、後の江西竜派は詩と禅を同一として捉えた。江西竜派について五山文学を大きく二つに分けた時の境界線上に立つ人とし、その理由として、艶詩が顕在化したことと、新奇な詩風に加えて、詩禅一致論の提唱者であることを挙げた。この考えが万里集九・天隠竜沢・景徐周麟に展開されたことを考えると、理念上ではやはり十四世紀から十五世紀にかけては、詩文が修禅のなかに位置付けられた時代と見ることができる。

④江西竜派の作品の特徴は、その文集『続翠稿』に頻繁に注が付されているという点にもある。それぞれ手法は違うが、それは江西竜派の詩学の徒である九淵竜琛や万里集九にも見出すことができる。以後、近くにそのことを踏襲するものは容易に見出せないが、小さくともこの機運にどのような特徴があって、何を踏襲しているのかを解明することは、五山文学のまさに分岐点における姿態の一齣を明らかにすることになるはずである。五山僧のその詩学の相伝は抄物において過剰な深読み、所謂「底意」を生む。そもそも「底意」が顕著な『三体詩』の「底意」の上限は江西竜派または心田清播あたりと考えられる。その「底意」は歌学の六義論にも派生した。「穿鑿」「底意」双方の語が使われている『朱子語類』は『三体詩』諸抄で六義中の「賦」「比」「興」を説明するのに引用されるが、石神秀晃氏はその六義を中心に宗祇の『古今集』注の「裏説」を景徐周麟の『毛詩聞書』と結び付けた。江西竜派の甥である正宗竜統の異母兄弟東常縁が宗祇に裏説を伝えたとしたのは片桐洋一氏で、寺島樵一氏はその「裏説」を三鳥の秘伝に見て、小高道子氏は『両度聞書』と同種の牽強付会が耕雲（一三五

〇～一四二九）の『古今集耕雲聞書』に見られることを示した。同書「六義の事」に『三体詩』が引用されているのも、『三体詩』天隠注またはそれをもとにして解した抄物の影響であると考えられる。耕雲から確認される「裏説」が常縁から宗祇へと移り、耕雲の漢学を賞賛した惟肖得巌が(『東海　瑤華集』巻二「耕雲老人寿像」)、江西竜派とともに義堂周信から『三体詩』の講義を受け、江西竜派は九淵竜琛と村庵霊彦に講じてそれを正宗竜統に講じていることは、抄物における「底意」と歌学における「裏説」の交流を推測することができる。のみならず、この耕雲の『耕雲口伝』「本歌取様の事」で黄山谷「謫_居黔南_。十首」(『山谷詩集』巻十二）の白詩からの点化に言及し、それは後の二条良基に受け継がれることから、その裏説と換骨奪胎論もまた無縁ではなかったと推測されるのである。例えば、『三体詩』に「底意」として安史の乱を読み取ることなどは、応仁の乱を体験した禅僧に自然の発想であると考えられるが、乱中の閉塞状態は、さらに詩の贈答等によって彼らの紐帯を増したのではないかとも想像されるのである。「底意」の隆盛の時期は、唱和や詩学の啓蒙に根ざした自注の出現、江西竜派・九淵竜琛・万里集九の時代と重なるからである。のみならず、同時に和歌において「裏説」を解した心敬・宗祇の連歌に、やはり啓蒙的な自注が付されていることとも符合するからである。良基周辺に自注はなかったが、宗砌あたりから自注が見られることを指摘したのは島津忠夫氏である。氏はその宗砌の自注の第一として、『古今集』『新古今集』『源氏』『狭衣物語』などからの本歌・本説の指摘であるとし、連歌という場を注したとした。それはあたかも、『梅花無尽蔵』の自注が唱和詩に多いことと重なる。さらに氏は、宗祇に連歌を施した心敬の場合は「心敬の作意を理解してくれそうもない鑑賞者に対しての解明であった」とした。それは、抄物隆盛期において江西竜派が九淵竜琛の添削を行ったことや、万里集九がその作を請われていたことに通じる。万里集九は実際心敬を理解していた。彼の「季揚首座和韻序。賛主座」(『梅花無尽蔵』第六)で賛ずる季揚の叔父は心敬で、その序のなかで十住院心敬の和歌の伝播を誇張している。万里と心敬はともに自らの作をもって詩学を伝える側であったというこの点で自注を付す環境下にあったことになる。

⑤古代から日本漢詩は中国作品に依拠してきた。『懐風藻』や勅撰三集の『文選』および初唐詩への傾倒、小野篁から始まるとされる『白氏文集』の受容などで、室町に至っては、宋代の評価を受け入れて、杜甫・蘇東坡・黄山谷などの作品に依拠してきた。その手法は、種種であるが、特に五山に至っては、漢詩の一句をそのまま引用するという手法を散見することができる。このことは当時の作詩傾向の一端を表していると考えられるのである。

⑥平安前期には『文選』、平安中期以降には『白氏文集』に依拠していた日本漢詩文は、室町には、蘇東坡・黄山谷に傾倒することになる。この蘇黄に加えて、総集としては『三体詩』が禅僧によって学習の対象となり、多くの講釈も行われた。と同時に引用の対象にもなった。五山における『三体詩』学習は特にその解釈が過激になり、「底意」という深読みをする。一方、製作における引用においては、前代の表現を公然と引用する黄山谷の「換骨奪胎」が早くから意識されていた。両者は無関係ではない。つまり、彼らが『三体詩』の表現を換骨奪胎する場合、彼ら独特の解釈「底意」に基づいている場合があると考えられるのである。

⑦梅花は古代から最も多く詠まれてきた景物であるから、その変遷を辿ることによって、時代の変遷の一端を理解することができるはずである。特に五山に至ると、梅花は禅語録や宋詩からの影響によって、その精神性を表出していく。それはやはり五山詩の一齣を示しているといえる。五山漢詩は、古代の漢詩の流れが途絶えて再興したものと捉えられているが、平安・鎌倉の漢詩作者と五山のそれとは作者層が違うこともあって、その隔たりは少なくない。梅に関しても、小林祥次郎氏は、平安漢詩の賦し方は、後代には影響を及ぼしていないとする。大局的に文学史を通観すると、そう言えるのであるが、厳密には、五山詩に平安を継承している梅の賦し方がないわけではない。五山の梅の実は、生活に根ざした描写によって具体的である。と同時に、禅語録によって、概念的である。それは、その実の成熟や酸味によっての止渇などやはり肯定的なイメージを有する。この点、それ以前の古代漢詩とは相違する点である。

⑧古代の日本歌論は、中国詩論に依拠してきた。現存最古の書『歌経標式』に記される歌病は、例えば沈約などの八病に由来し、後の『和歌作式』『和歌体十種』に踏襲されるところとなる。『古今集』の序においては、『詩経』大序の六義を下敷きにし、『新撰髄脳』の「髄脳」や『和歌九品』における等級を区別する「品」の概念も、中国書『詩品』に見られる。ただそれらは依拠したことをを明示してはいない。平安末期以後、

漸くその中国詩論に言及するようになった。詩論と歌論との類似・相違が意識される。室町期に至っては、さらに宋代詩論を受容するようになったが、この歌論に及ぼした詩論の具体例は先学に指摘されてきた。特に宋代詩論は、一句焦点を絞り、さらにそのなかの一語に対しても評価を下した。それは日本中世における歌論に取り入れられ、例えば、詩のなかの重要な部分をあらわす「眼」が連歌論に用いられていることが指摘されているが、他にも語句に対する論が歌論に見られる。
⑨山谷抄の諸説は、往々にして詩の背景に政治的風刺を取るが、特に一韓智翊の抄には、その傾向が強い。それは、熙寧期に従事した政党への批判から、直接王安石への批判へと発展していく。その説の由来は多岐にわたると考えられる。そもそも、山谷詩そのものに政治的性格が強い。それは彼の詩作時期を貫いていた。一韓は、その理念を敷衍して、拡大解釈を行ったと考えられる。それは、『山谷詩集』の中国注釈である任淵注によって補強される。任淵は典拠を指摘するばかりでなく、時に山谷詩を解釈しようとしている。加えて、他の抄物の解釈にも引きずられている可能性も捨て切れない。特に、新法を強く批判した蘇東坡の詩集には一韓智翊の抄物があり、そこには『山谷抄』と合致する山谷詩観が確認されるのである（『四河入海』）。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①「中世歌論に見られる宋代詩論」小野泰央（「群馬高専レビュー」査読無・第２８号Ｐ２１～２７・2010 年
②「詩を論じる詩―五山詩の理知性について―」小野泰央（「群馬高専レビュー」査読無・第２８号Ｐ１１～１９・2010 年
③「五山詩文における梅花」小野泰央（「群馬高専レビュー」査読無・第２８号Ｐ１～１０・2010 年
④「五山詩と三体詩抄」小野泰央（「東洋文化」査読有・復刊第１０４号Ｐ２２～３５・2010 年
⑤「五山文学の自注」―『梅花無尽蔵』を中心に―」小野泰央（「中央大学国文」査読有・第５３号Ｐ５０～６１・2010 年

〔学会発表〕（計１件）
① 「一韓智翊『山谷抄』の王安石批判について」（和漢比較文学会例会東部、於早稲田大学、平成２０年１月２６日）

６．研究組織
(1)研究代表者
小野　泰央（ONO　YASUO）
群馬工業高等専門学校・一般教科（人文）・教授
研究者番号：90280354